

# キャンパスを歩き、街を訪ねる。

研究室の学生と弥生キャンパスの圃場を歩き、この4月、本郷キャンパスに開園したけやき保育園を訪ねる。

## 水とともに愛情も注ぐ

東大農学部圃場

蝉の声の降る木陰を抜け、夏の陽のなかに出ると、白いビニールハウスがいくつも目に飛び込んできた。ここは弥生キャンパスの東にある農学部圃場。一見したところ農家のビニールハウスと変わらないが、研究室の学生たちにとっては研究テーマを担う大切な実験場だ。

「今朝もお水をあげにきました」にこやかにそう話すのは、

ここでレモングラスの研究をしている温 欣宜さん。台湾からの留学生だ。母国では園芸学を修め、ハーブに興味を持って、東大農学部の大杉教授の研究室にやってきた。

最近のアロマブームで、レモングラスに含まれるシトラールは天然香料として注目される。「研究がうまくいけば、レモングラス精油成分の抽出量を増やせるかもしれません」と温さんは微笑む。

朝夕の水やりは欠かせぬ日課だ。友人たちは夏休みに里帰りするが、温さんはこの仕事のため、帰っていない。そういう夏を迎えてすでに3年経つが、今年から佐賀県武雄市との共同研究も始まるので、母国で家族の顔を見るのは当分先の話になりそうだ。



もう一人、圃場を案内してくれたのは栽培学研究室の小林さん。植物形態学の分野でとくに稲穂の形態に関心を持ち、その形ができていくメカニズムについて基礎的な知見を集めている。

この研究はどんな役に立つのですか、と訊くと、小林さんは汗を拭きながら「将来の話ですが」と前置きし、「穂に付く実の数をコントロールできるようになります」と力強く答えた。

何年続くかはわからないが、それまで地道な草取りと水やりが続く。「稲の世話をしてきて今年で4年目ですが、ようやくわかってきたことがあります」と小林さんが笑う。「植物も、愛情をもって接しないと、応えてくれないんですよ。切っても、叩いても、文句を言わないけれど、心をこめて世話をしないと、すねてしまう。元気に育ってくれないです」

水といっしょに愛情も注ぐ。それが農学のはじめの一歩なのかもしれない。



生産・環境生物学専攻作物学研究室  
博士課程1年 温 欣宜さん



生産・環境生物学専攻栽培学研究室  
博士課程1年 小林 薫さん

